都市・建築遺産論研究室

時間軸・空間軸で土地、地域が有する本質を読み解く

赤松加寿江 講師
［デザイン・建築学系］

［経歴］

2006年04月–
東京芸術大学美術学部建築学科 教育研究助手

2012年04月–
東京大学大学院工学系研究科
都市持続再生研究センター 特任助教

2013年04月–
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
特任研究員

2015年03月–
京都工芸繊維大学 講師

［研究分野］
イタリア建築史・都市史, 文化的景観

研究室探訪

都市・建築遺産論研究室

［研究概要］

建物や都市空間の実測と、
絵図や古文書等の史料分析を通じて、
空間と社会を成り立たせる仕組みの理解に
取り組んでいます。
また、ぶどう畑等の自然と人がともにつくりだす
文化的景観の分析もテーマの一つです。

**いまやオンラインの地図サービスで
世界中あらゆる地域の情報が得られるようになりました。
しかし、そこに映るのはあくまで表層部分に過ぎません。
都市・建築遺産論研究室では、徹底的なフィールドワークにより
地域の深部、エッセンスの読解に取り組んでいます。**

建築史、都市史、そして領域史へ新たな視野と方法を求めて

デザイン・建築学系の学びの対象は、建築物だけにとどまりません。建築を中心により広い空間、住民やコミュニティまで研究しているのが都市・建築遺産論研究室の赤松加寿江先生です。
赤松先生は現在の研究に至ったきっかけをこう語ります。「修士の時にイタリアに留学し劇場の研究をしていました。しかし、現地で研究を進めるうちに、興味の対象が建物自体から、活気に満ちた都市空間に移っていきました。たとえば広場は理詰めで造られたものではなく、お祭りやイベントを核とした成り立ちを持っていました。そこには生きた人々の営みが背景にあったのです。そこから都市史へと関心が移っていきました」。
では、都市史とはどのような学問なのでしょうか。「都市史は、都市を構成する中小の住宅、道、広場等を研究対象とします。人々が住まう様子や都市空間の変化を調べ、社会構造と空間構造の両面から読み解いていきます」。さらに、現在では“領域史”という分野の研究が展開されています。「人間が造った建築や都市といった構築物だけでなく、地理的な形状や地質といった“自然”も人々の暮らしの基盤を形成しています。そうした自然へのアプローチを強化し、視野を広げて地域を読み解こうとするのが領域史です」。もともとはイタリアに“テリトーリオ”という領域の捉え方があり、その考えが日本に輸入されて領域史の研究が関心を集めています。この言葉は“水のテリトーリオ”や“食文化のテリトーリオ”のように使われ、社会、文化、経済など多様な地理的広がりを捉える包括的な概念です。
領域史の研究は2010年代から活発化しました。その背景には2011年の東日本大震災があったと言います。「震災の被害は都市の行政区画を超えて広がっていき、一部の地域では、もともと何があったのかがわからなくなってしまいました。自分たちの土地の歴史がわからない。アイデンティティの欠損が生じました。気候変動や災害の時に行政区画は何の意味も持たず、都市だけを見ていては対応ができません。こうした体験から、これまでとは違う見方で地域を捉えなおす必要性に迫られたのです」。

地域のDNAを読み解き未来へとつなげていく

研究を進めていく際には史料分析とフィールドワークが軸となります。もっとも重視する史料はやはり地図です。「各国でGIS（地理情報システム）が整備されており、地質や土地の利用状況といった情報を得ることができます」。また、当時の社会背景を知るために古文書を調べる場合もあると言います。そうした分析に加えて現地にフィールドワークに赴き、徹底的に実測を行います。「住居はもちろん、石垣や植生、水利施設といったものまで計測します。現地の方々へのヒアリングも欠かせません。そうして集めた情報をまとめていくことで、オリジナルの地図が作成できます。すると、そこから様々な事実が見えてきます。人の手による構築物はどのように増えていったのか、どのようにして価値がつくられていったのか。このように時間軸と空間軸で地域の成り立ちを考え、その性質を紐解くことを、私は“土地のDNAを読む”と表現しています」。どこの土地にもその場所ならではの個性が必ずあります、と赤松先生。DNAの読解を目指す理由について次のように語ります。「地域の未来を考えた時、この先何も変化しないというわけにはいきません。古い建物は改修が必要になりますし、より便利な設備を整えたいという話も出てくるでしょう。そうした現実に直面した際、変わっていいものとそうでないものを見極めるために本質を知ろうとしています」。
土地のDNAをより深く読み解くために、先生はテリトーリオや従来の領域史の枠組みを超えた新たなアプローチ手法を探究しています。キーワードは“テロワール”。フランスで用いられるワイン用語で、広義には気候や土の質、生産方法といったワイン製造に関する条件すべてを指します。「日本語で端的に表すと“天地人”ですね。天気、地質、人間。その意味をさらに拡張して考えようとしているところです。そこに住んでいる人の文化的な背景や、土地所有の形式などもワインの味を織り成す背景になります。それらを総合的に分析・理解し、その土地ゆえに生じた産品の特徴や土地の価値を捉えていく試みを行っています。都市史・建築史ではほとんど取り組まれてこなかった、新たな価値軸を盛り込んだ研究です」。
現在、このテロワールの観点を取り入れた研究をフランス、イタリア、台湾、日本で進めています。「たとえば最近ではトリノのぶどう畑と宇治の茶畑をテーマとして比較分析を行っています。ランドスケープや生産体系、流通の仕組み、地質などが比較のポイントです」。まったく異なるもののように思われる二つの畑ですが、共通点も多く見つかってきていると言います。「今年はトリノ工科大学と本学との合同ワークショップも実施しています。3月にはトリノ工科大学の学生が宇治市湯船地区に滞在。過疎化が進み、茶生産も落ち込むこの地域を復活させるにはどうすればよいか、本学の学生とともに解決策を考案し、自治体の方にプレゼンテーションを行っていきます」。9月にはイタリア・ピエモンテでも同様の活動が予定されています。イタリアでも日本でも、地方が抱える問題意識は共通のようです。

Fig.1———史料に関するディスカッションで理解を深める

Fig.2———宇治市でのワークショップの一幕

Fig.3———イタリアでの現地調査

この先も地域を存続させるために

先生が考えるこの研究の醍醐味とは。「相手にするのは生きている景観です。凍結的な保存ではなく、変わっていくことが前提とされます。だからこそエッセンスを見抜いて生き続けさせる工夫が必要であり、発想を巡らせ、提案する意義があるのです。研究を通して、住民の方々が自分たちの土地について新たな視点を持つきっかけが生まれる時もあります。また反対に、私たちの知らない世界について教わることもたくさんあります」。
最後に、これから研究に進む学生に対して次のようなメッセージをいただきました。「日頃から地域に対する問題意識を持つことが大切です。そして、自分がどのように解決できるかを前向きに考えましょう。目を向ける場所を限定せず、色々なものに対して好奇心を持ってください。土地の歴史が自分や未来にいかに直結するかを意識できると、楽しく学べると思います」。